

佑啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

決意新たに

里見吉英

とうとう、古希を迎えた。気持ちには二十代の頃とかわらないのに職員は私が七十歳になったのだと止めを刺すように祝ってくれた。その気持ちも本当にありがたかった。しかし、そのたびに今まで味わったことのない心模様になるのだった。

令和六年を迎え、新年会を兼ね成人者のお祝いの会が続いた。小さなころの映像や保護者の挨拶を聞いた時に涙と笑いの二十年間を想像する。それぞれの家族や本人たちの表情を見てみると、やはり今までの新たな年を迎える気持ちと若干感慨も異なり、あの頃が思い浮かんだ。

紙関機 啓 第127号
法人設立以来、三十年もあつという間だった。月並みだがいろいろあった。難所を乗り越えようやうとオープンに漕ぎつけた時、入所定員六十人に三百名以上の入所希望があった。佑啓会では施設を開所するにあたり地域への対応や県との協議もコンサルに委ねること

援につながる保護者にも伝わっていたようだ。とてもすべての対応は難しい。役所に相談し、定員の二倍の面接の結果で利用者は決まった。さあ、これからという時に、突然訪ねてきた人がいた。

「自分の子供は、なぜ入所できなかったのか」「障害が重いからなのか」「寄付をしていないからなのか」と尋問のような口調である。当時、養護学校の卒業後の進路先がなく、入所施設の待機者が年々増加するという現象が続き、入所に際しゴルフ会員権並みの寄付を求められることもあった。保護者の有志が資金を出し合い、できた施設に入所するときは同じ条件を求められたのだ。私たちはもちろん寄付も求めなかったし、入所の判断については、家庭環境を考慮するとともに施設全体の生活が安定するかという視点に立って決定した。勤務していた県立施設のように経験豊富な人材も、バックグラウンドもないのである。もちろん措置時代のこと、行政との協議の結果だった。

数々の相談を受け、家族の苦勞も感じたからこそ資金を提供し反

対する人たちに頭も下げてきた。いわば身内と思っていた立場からの恫喝かと思えば、ねちねち「なんとかならないか」と執拗な質問攻めは長時間に及んだ。あたかも自供させようとする刑事ドラマのようである。もちろん、テレビのように、かつ井も出ないし一服もさせてくれない。三十代の新米施設長だから何とか落とせると思われたのか。しかし決定したことを覆すことはもちろんできない。繰り返し返しの説明に業を煮やし捨てて台詞を残して帰っていった。

行政には報告したものの、溜飲が下がることはなかった。ようやく利用者だけのことを考えられると思っただけに、今度は家族からの批判だ。理想を追った仕事だっただけに精神的なダメージは大きかった。

その後、家族との懇親の場でのことだった。「子供はかわいいが親は憎らしい」頭にあつたことが言葉になってしまった。この時はお酒による脱線の事故であっても覆水盆に返らず。



ふる里学舎建設中の様子

自分で描いた施設をと思った時から今まで、年齢など意識することなどなかった。気になることの解決を求めた日々。ニーズに基づくとはいえ、新たな仕事は作ってきたものの安定を揺るがすこと

にも繋がりがかねない。ドミノの駒を並べるような不安に抗いながら、続けることしかできない性分。そんな緊張の日常を過ごしているからなのか、ひとたび宴会が始まればもっと頑張らねばと自らを鼓舞し、周囲にも発破をかけていることに気づく。



そんな日々、また気の重くなるニュースを見てしまった。横浜で開設予定のグループホームが近隣住民の反対によって撤退することが決まったというのだ。

「不愉快だ」資料見るなり声荒げ「住民差別の意識ない」見出しを見ただけで過去の説明会の現場を昨日のことのように思い出す。全く同じ内容が時を経ても繰り返されている。障害の理解など、教科書のように説いても無駄だった。彼らは知っているのだ。共生社会だとか差別解消のフレーズが世に広まり、関心があればすぐに情報に手に入る。知識としては既に持ち合わせているからこそ、自らの安心に拘っているだけなのだ。

だから(障害者がここに来るより)「もつといい場所があるはず」との表現しかでないのである。残念ながら現前の事実は、障害に対する感情の不変を証明しているようなものだ。この疎外と敬遠がある限り理想のゴールは遠いと感じざるを得ない。

「入居者の精神的負担を踏まえた判断による撤退」だという。複雑である。利用者だけでなく、

働く職員も当然萎縮してしまうだろう。

我々の経験をまさに再現したようであるが、運営が始まり少しずつ地域との関係が氷解していくことも経験している。お陰様で、そんな経緯を経て立ち上げた事業所も地域との関係は良好で何とか平穩に運営ができています。

潮目が変わる機会はどこにもある。地域との関係に敏感になつていればそのチャンスは必ずある。社会福祉法人の地域貢献は、地域に向き合う中から生まれるのであつて、大仰な題目を唱えていても始まらない。



子供達からの古希のお祝い

新年早々、来し方ばかりが蘇りネガティブな話になってしまったが、そんなことを忘れさせてくれたのが子供たちとの時間だ。

児童施設は南房総の千倉に続き、袖ヶ浦市でも運営している。施設での生活を余儀なくされている理由は一人ひとり様々だが、悲しいかな家に帰りたいという言葉が聞かれない。小さい時から生きていく最低限度のことを満たされない環境に置かれた事情、それは、殆ど親たちが責任を放棄した結果だ。食べるものや、ゆつたりと眠る場所、友達と遊ぶ環境もなく、親の愛情から見放された子供たちがたどり着いた場所が施設だとして

たらできる限りのことをしたい。残念なことこうした子供たちが増え、法人内の二か所の施設だけでは受け入れきれない状況になり、県や市との協議により船橋市にも建設が決まった。予定地の看板を見た近隣住民から行政へ電話が入り。担当者から法人の連絡先を教えたので対応を委ねてきた。まただ。

その電話を切った矢先。ベルが鳴った。「騒音を発する施設には反対します」運動会はやるのか、外で遊ぶ声がうるさい。パークレットボールなど冗談じゃない「静かな場を求めてアパートを選んだのに」という脅しで長い話は終わった。

プランの修正を余儀なくされたが匿名の意見に翻弄される気持ち悪さは以前とは違う。顔の見えない不安で展開が読めない。これまで新しい地域での施設整備はできればやりたくないと思いがあつたのだが、食事がおいしいと言い、行事を楽しみにしている子供たちのことを思うと撤退はできない。

差異や集団に対する不安感、法律や制度がいかに変わろうとも排除できない。人間が原初的に持っている本能なのかもしれない。コロナに対しても反応は様々だった。多様性を認める時代だというのだから、考えられないような人もいるのだ。直接対峙して問題を明確にすることからまた始めよう。子供たちの笑顔が力を与えてくれるから。(佑啓会 理事長)

家族会一泊研修に

参加して 磯野 佳子

息子とふる里学舎の出会いが支援学校からの施設見学でした。息子が初めてふる里学舎にお世話になったのは二〇〇八年、中三の夏の合宿からでした。その後も土・日・祭日の短期入所をさせて頂き徐々に、職員の方々とも顔なじみになり障害の様子も知ってもらいました。

二〇一七年二月に、父親が亡くなり、母一人でこの先どうしようかと悩んでいた時、ふる里学舎から新しく開所した蔵波に異動する方が居るので「入所しますか」とお声掛け頂き、二〇一八年四月から一寮でお世話になっていきます。

現在、息子は三十五歳です。入所当初、見た目は落ち着いていましたが、夜部屋から出てしまいがちで、夜間集め部屋に持ち込むという拘りが続きましたので、強い不安緊張感を和らげる為、薬を飲むことになりました。その後は穏やかな毎を送っています。

コロナの四年間は、職員の皆様には色々配慮頂き、楽しい日々を過ごさせて頂きました。心から感謝しております。

二〇二四年二月五日、六日にコロナ後四年振りの家族一泊研修会。二年振りの大雪警報の出ている中でのドキドキの研修会に「どうなるの」と心を痛めた人も多かったと思われる初日でした。参加者は、職員、保護者として約百三十名。場所は鴨川グラウンドホテルです。

ホテル到着後、十五時から里見理事長の講話の初めに動画(ふる里学舎のあゆみ)を観ました。その後の里見理事長のお話では「六十五歳からの子供達の行く末、障害施設から介護施設に移行するかの時代を考えた将来障害年金だけで生活出来るか?介護保険を使ってやっていくのが良いかなど、まだまだ不安がいっぱいですが、ふる里学舎では利用者のことをちゃんと考えています」との言葉に安心しました。

また、ここ十年くらい障害のある人が増えている現状があり、原因は高齢出産や医療の発展など考えられます。問題は今の生活、障害年金、障害制度が維持していけるのか心配で、ますます多難な時代になる心配がいつぱいあります。

施設を開所するにあたっては市や区から頼まれても、近隣住民の理解が得られず何回も何回も話し合いを重ねるも結局理解が得られないまま運営がスタートしたこともあったそうです。ある時、地域のお祭りに神輿の担ぎ手として参加して欲しいという話を受けて、沢山の職員が担ぎに駆けつけ、地域の皆さんにも感謝されるようになったという話を聞いて胸が熱くなりました。杜のホールに続いて、蔵波にも体育館が出来るそうです。地域の皆さんにも使用して頂きたいという里見理事長の熱い思いを伺いました。時代の変遷とともに障害のある方への理解が少しでも進んでいいたら嬉しく思います。

里見常務も若い人材の補強を考えて、職員の人手不足の解消に尽力して下さっていることがとっても心強いです。



里見理事長の講話の様子

宴会は久々に会う職員、親と四年間の空白を埋めるかの様に食事をしながらの話が続きません。子供のころ、作業のこと、コロナの時の様子や、なかには子供が不安定でどうしたら良いものか相談する方も居り、一緒に聞いていて勉強になりました。宴会を締めくくる最後の動画は

ふる里学舎蔵波青年寮の子供たちの可愛いダンス、ふる里学舎千倉の七人のBTS(ダイナマイト)のキレキレダンス、とてもカッコ良かったです。心が暖かく幸せになりました。三本締めでお開き。その後の二次会では宴会の時に話せなかった方々と楽しく談笑しました。また、カラオケが始まり、里見理事長と里見常務親子二人のデュエットはとてもステキで感激しました。



朝起きたら雪は薄ら雪化粧程度でホッとしてました。朝食のあと恒例のパン・花・木工・ジャムの販売も完了。皆さんふる里学舎の花を抱えて満面の笑みで帰路に就きました。この研修会に参加して職員の方々との関係も築くことが出来たこと、感謝いたします。ありがとうございました。

(ふる里学舎 保護者)

「災害現場に派遣されて」 椎名 弘行

一月一日。令和六年は地震のニュースから始まった。最大震度七を觀測した能登半島は時間の経過とともに甚大な被害が露わになった。東日本大震災以後、こうした災害に対応する一環としてDWAATが組織されていた。災害・福祉・支援・チームの頭文字をとったもので、千葉県も令和二年に派遣についての協定を福祉関係十三団体との間で協定を結んでいる。

里見理事長が会長をしている千葉県知的障害者福祉協会もその一つで私は介護福祉士という立場と共に、比較的自由が利くという私的理由で登録していた。県からの依頼により、二月二日から八日までの派遣が

決定した。避難所での支援が主な目的なのだが、平時の研修が役に立つのか、発災後一か月を過ぎてからの支援はどんなものがあるのだろうかという一抹の不安があった。

初日は県社協でのオリエンテーションから始まった。参加者は、生活クラブ風の村・聖マリア園・いすみ学園・北総育成園・ふる里学舎の私の五名で構成され、リーダーに聖マリア園の職員が指名され、サブリーダーに私が選ばれた。千葉県の派遣チームは我々で四班目になる。

活動内容として一般避難所での避難者支援、要配慮者へのアクセスメント、日常生活支援、環境整備等を行うとの説明を受ける。

宿泊場所の富山駅近くのビジネスホテルを拠点とし、活動場所は石川県七尾市和倉小学校の一般避難所に決まった。オリエンテーション後、新幹線で富山県まで移動したのだが出発前の記念写真は出征兵士のようなだったと車内で思った。

富山県のホテルに到着後、石川県庁に設置されたDWAAT本部に向かった。ここには全社協・滋賀県DWAATが常駐し各拠点の地域リーダーが配置されており一・五次避難所に群馬・七尾地域に京都・志賀地域に静岡など各地からの応援体制が敷かれていた。本部から現在の状況について説明を受け、千葉県の業務は、七尾市和倉小学校に常駐し西湊コミュニティセンター避難所を巡回することが告げられた。

二日目に、先遣隊である三班と共に、活動場所の和倉小学校に向かった。片道九十kmの道のりは高速道路を使ったのだが五十km制限の表示が点在し、二時間ほどかかっている。どの道でも路面が波打ち、アスファルトには亀裂の補修痕が生々しい。街の色も、屋根を覆うブルーシートにより想像していた温泉場の風情は一変している。コンビニやチェーン店の薬局、ホームセンターは営業しているものの、駐車場には、仮設トイレが設置され、立ち寄ったコンビニのトイレにも「使用中」の紙が

張られていた。上下水道が今になっても復旧出来ていないのだ。



ひび割れ、隆起した道路(石川県内)

避難所の様子は、体育館内にキャンプ用の簡易テントがブロックに十二張り、AとEまでのエリアに分けられている。独居の高齢者から知的障害者を持つ子供家族など様々な家庭環境の避難者がいた。入り口には炊き出し用のテントが三張、避難者の中に中華料理屋を営んでいる方がいて、主にお方が作っているという話を聞く。その脇には洗濯機があり、水は大きな水枕のようなもので溜めてあり循環するシステムになっている。避難所でも問題になるのはトイレである。学校内のトイレは、ビニール袋を掛け排尿し給水ポリマーを入れて燃えるゴミとして処理。仮設トイレが設置されているが、こちらは大便専用になっている。住人の物資は、カップラーメン、衛生用品、お菓子等が手に取りやすい所に設置されているもののやはり今までの生活とはかけ離れた現実である。

見ず知らずの人間が生活拠点に立ち入るのだから住民から自分たちが何かを理解して貰う為にチラシも配布した。避難者の中に民生委員の女性がいて彼らの生活を取りまとめている。避難者どうしの問題については、介入せずに生活をしている人たちが解決してもらおうように促しているという。

被災地で何をしたいのか想像もつかずに現地に入ったが実際の避難所の生活は、住民が体育館という狭い空間の中に街を構成しているように感じた。見慣れない人たちが一週間ごとに入れ替わり住民からすれば理由もわからずに詮索されることは不快に感じるだろう。石川県DWAAT本部からは、地元主体と話があった。避難を余儀なくされている人たちは、自身が主体となり、今後の生活を築いていかなければならないのである。

被災地からかけ離れた安穩の生活をしていながら、短い期間支援に入ると複雑な心境だ。相談を受け、愚痴を聞いて、心身の健康状態を保ち安心して今後の生活が送れる様に支援することに繋がっていたのだろう。日々、復興の状況も変化し、住民の健康状態や共同生活が上手くいかないと退去し別の場所へ移ってゆく人もいる。

小学校側は、学校再開に向け動き始めた。ライフラインの復旧が進むことで避難所の閉鎖をすすめ、支援の手を被害が甚大であった地域へ移行していくというが、まだまだ復旧のめども立たない場所も多い。少しでも早く避難生活をしている人々が、安心して生活できるような環境が整う事を願うばかりである。

(ふる里学舎 支援員)

編集後記

早いものでもう三月。出会いと別れの季節を迎え、新しい仲間が加わる待ち遠しさを胸に佑啓一二七号をお届けします。

(支援員 依田育美)